

文化高知

2009年5月 NO.149



「後れげ」 田島 栄

〈もくじ〉

人々の「ネットワーク」を活用して つきない三代目の悩み	小松康夫	2
いったい高知で何が起きているのか!	円尾敏郎	3
第19回高知出版学術賞を審査して	中内光昭	4~5
かえるのうたがきこえてくるよ。~高知県にすむカエルたち~	谷地森秀二	6~7
サンタの国から〈後編〉	渡辺知子	8~9
ナマステ ネパール! (下)	嶋崎京都	10
言葉の現場から⑮ 「坊っちゃん」のなぞを読み解く	広井 護	11
高知のギャラリー⑪ POURQUOI	林 和加	12
高知市文化振興事業団 3月~4月の事業から		13
風俗歳時記・風伯		14~15

某

日、先輩に呼び出された。その先輩はぶっさらばうに、「おまえさんが持っているモノをそろそろ社会にお返しせにゃならん時期が来たのじゃないか」と言う。そして、「その選択肢の一つとして考えてみたらどうか」と意外に真剣な表情で提案されたのが「横山隆一記念まんが館」に勤務する、という寝耳に水の話なのだ。

その少し前ごろから「そろそろ人生の締め切りについて真剣に考えなければならぬ」と思い始めた。お四国巡りをするか。発表できるようなものは無理だろうが、昔から書きたかったことを小説にしたい：などとぼんやり考えたりするようになった。そんな年齢になったということだろうが、この「残された歳月、日数」と「やりたいこと、やれること」との間の相関関係、差引勘定はどうなるのか。六十三歳になって遅まきながら「解きたい難問」に直面したということなのだろう。

「この会社で、この人生で一体何ができるのか」そんな期待と不安が交錯した複雑な思いを抱いて高知新聞社に入社。夢中になって走り続け、ありがたいことに大勢の先輩、同僚や後輩、いろんな人々に支えられ、あつというにより住居費を抑え、身体が動く限り、映画のフィルムライブラリーである京橋のフィルムセンターに通うためである。今や、日本映画の百年以上の歴史を俯瞰できる場所は、東京にしかない。その中心が銀座の隣町・京橋だ。

俯瞰できるからといって、既に失われたものは、もう取り戻せない。昭和二十年八月十五日までに封切られた日本映画の約九割は既に存在しない。本土空襲を受けて、フィルム倉庫と現像所と映画館が焼けてしまったからだ。戦争が主な原因だ。また、可燃性から不燃性のプリントへの切り替えが遅れたことにより、戦後も火災がしばしば起こっている。昭和二十四年、高知市の旧中種商店街の映画館・国際劇場の火災を思い出していただきたい。

戦後封切られた日本映画は、二万本以上もあり、年々、数百本ずつ増えていく。いつまで経っても、すべての日本映画を見ることはできない。どんなに頑張っても、一人では、年々、日本映画を俯瞰できなくなっ

人々の「ネットワーク」を活用して つきない 三代目の悩み 小松康夫

間に四十年の星霜が過ぎ去った。定年も過ぎ、囑託に。そして、今度は「会社」という文字が消え「この残りの人生で一体何ができるか」という思いが日ごとに強くなったことも

間違いない。長くないはずの「残された歳月」をどう生きるか。このままだと、きつと精神的にふらふらと放浪し馬鹿を重ね、そう遠くない「ある日」、ついには…という未来図が目に見える。ぐずぐずと考えこみながら、結局は「何もできないな」という変に確信めいたモノが大きくたってきたころに突然の先輩からの呼び出しだったのである。

先輩は追い打ちをかけるように「このまま引きこもるわけにはゆかないだろう」と言う。

「もう少し元気に働いてみる」というありがたいお話で、この言葉が「横山隆一記念まんが館」に身を置けきつかけとなったのだ。問題は「持っているもの」の中身であり、これには全く自信がない。

長い新聞記者生活では後先考えずに突っ走ってきたのだから、そんな「蓄え」などあるはずがない。持っている「何か」を返せと言うが、これは大変困ったことになる…：そう思いながらも、ついついお引き受けしたのは、なぜか。

県内外の漫画家の方々とは多少のお付き合いがあったし、横山隆一さんの鎌倉のお宅を訪ねたこともある。何よりも昔から漫画は大好きだったので、あるいは「何か」できるかも

しれないと思った。そして、先輩の言う「持つてくるモノを返せ」というのは、きつと、「取材現場で知り合った数多くの優秀な人々の知恵を生かせ」であり、「そんな人々を何人か（結び合わせ）て、何か新しい世界を創り出したらどうか」ということだろうと想像した。

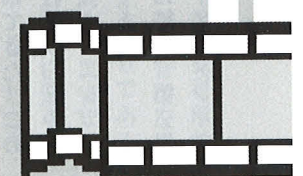
県内外で多彩な活躍を続けるプロ、セミプロの感性豊かな漫画家。アマチュアの漫画やコミック、アニメなどの愛好家はもとより、ジャンルを超越して多士済々の才能が眠っているのではないか。そんな作家や人々を「つないで」何かを生み出せ、と言いたいのではないか…：それならあるいはできるかもしれない、と考えたのである。

今は無我夢中で「館長」とは、を研修中だ。「育った」ところとは随分異なる環境の中で至るところで頭をぶつけて右往左往する悩み多い毎日だが、初代の佐竹茂市館長が見事な種をまき、次の下岡正文館長がそれを大きく豊かに育て上げた「横山隆一記念まんが館」だ。

「三代目がそんな遺産を食いつぶした」と言われないように、いろんな人々のご支援、ご協力を仰ぎながら頑張りたい。

こまつやすお／横山隆一記念まんが館館長

いつたい高知で 何が起きてい るのか！ 円尾敏郎



ていく。これは、あらゆる、現在進行形の創作物に言えることだ。しかし、一九七五年までの日本映画と決めてしまえば、別である。つまり、何人も映画ファンで、担当時代を分担していくしか俯瞰できる方法は残されていない。

一九七五年は、洋画が邦画の興行収入を抜き、弱りつつあった日本の撮影所システムがますます崩れていき、撮影所を持っている映画会社が映画を作る時代から、撮影所をレンタルして映画を製作する時代へと大きく移行していく年である。角川春樹さんによる映画製作開始が象徴的な出来事だ。

その四年後の一九七九年、私は、出身地の高松市から高知市に足を踏み入れて、高知市の映画館状況に驚く。活況を呈しているように見えたからだ。日本映画の父・マキノ省三さんの息子であるマキノ雅広監督と縁のある徳島県の佃興行（高知では高田興行）経営の第二劇場、東映の

三番館の高知あたご劇場、洋画の名作を中心に上映していた高知名画座など、下番館は多くのお客さんで賑わっていた。高知でも、一般映画の封切の集客力は衰えていったが、成人映画は健在で、ロマン・ポルノを上映し続ける高知日活（高知につかつ）、アカデミー外国語映画賞受賞作品『おくりびと』の監督・滝田洋二郎さんなどのピンク映画を数多く見た高知小劇、そして、洋画のピンク映画を上映していた高知中劇などが、独自の地位を確保していた。大都市の東京周辺、大阪周辺を除いて、高知市ほど、充実した映画館状況は、日本ではなかったと思う。

そんな映画天国・高知市も、常設の映画館が減っていき、それに変わるように自主上映団体が増えていく。現在、高知市の中心部では、高知あたたご劇場と高知小劇が孤軍奮闘している。そして、本来、「映画は映画館で見る」という考えを逆転させねばならないような、「見たい映画は

自主上映で」という状況が起こっている。日本映画全盛期なら、本末転倒の考えだが、地方都市では、郊外型のシネコンしか存在しないと云ってもいい状況に、反乱が、革命が起こりつつある。いや、もう起こっている。

しかし、数多くの自主上映団体が競い合うように自主上映会を催しているのは、高知だけだ。

そんな中、私も、昨年から高知県での自主上映を再開した。高知を出て、二十数年振りのことだ。何がが高知で起こりつつある。その現場で身をもって、変動を味わい尽くすには、自分もその渦中に飛び込まなくてはならない。傍観者では駄目だ。

何故、高知だけが？ 何故、いくつもの自主上映団体が？ 高知で何が起きているのか？ 自分の目で、耳で、身体で確認したい。

高知出版学術賞を 審査して

中内光昭

今年で高知出版学術賞も十九回を迎えた。その間、時代の流れに従い、本賞の性格も少しずつ変わってきたようである。本賞の対象は、高知県に關係する学術出版物か、県在住者の学術出版物である。後者の場合、高知県と關係するテーマであっても、無關係のテーマでも構わない。このため、創設当初は、より一般的な自然や民俗關係の著作なども選出されている。最近、学位論文關係の出版物が増える傾向と共に、「学術」を標榜する本賞にその種の出版物の応募が増える傾向が見られるようになってきた。これらの書物の中には、市中の読者を意識した、啓蒙的なものがある一方、専門的知識の印刷物に過ぎないものも見られた。

審査委員（八名）間で、本賞の性格について論議され、次のような合意が得られた。本「学術」賞は、主催の高知市文化振興事業団の性格から考えて、学術的成果そのものの顕彰より、優れた学術的出版を奨励すること、市民の教養に役立てることを本来の目的としている、ということである。したがって、いかに学術的に優れていても、市民への心づかいに欠けるような専門書はあまり評価されないことになった。

昨年と同数の二十三点の応募作から、第一回の審査委員会で九点が出され、最終的に第二回の委員会で、いかに高知にふさわしいテーマの次の三点が選ばれた。なお、これらに序列はついていない。

沢村正義著
「ユズの香り — 柚子は日本が
世界に誇れる柑橘 —」
フレグランスジャーナル社刊

主な内容は、ユズの来歴と植物学的特徴、産業の現状、香り成分の抽出法と香りの特徴、ユズ精油の機能性とアロマセラピー、香りの楽しみ方、などで、ユズが日本の世界に誇り得る柑橘であることを示している。

著者は香り成分に関する国際的な權威で、四十年の研究を背景に、専門的な知識から、極めて身近な話題まで、素人にも理解しやすい表現で、コンパクトにまとめられている。

現在、ユズが栽培されているのは日本と韓国だけで、高知県で、全国のほぼ半分のユズを生産している。土佐の人間には「柚の酢」はとりわけ懐かしい香りである。審査委員の一人は「昔、毎年冬になると、老人が背中の一升瓶を負うて『実生の柚の酢はいらんかね』と売りに来た」

「柚の酢の匂いのしない寿司は考えることもできなかった」と回想している。ユズの学名（種小名）が「junos」であるというのも、土佐人には嬉しい。ユズの香り成分はミカン類の中でも極めてユニークで、国際的に注目されていて、香料や化粧品としての将来性があることも、本県

にとって注目すべき事実である。文章はなだらかで読み易く、さわやかで興味深い。ユズの科学と文化に關する教養書であると共に、ユズ産業に携わる人々の教科書でもあると評価された。

山本長水・土佐派の家委員会共著
「土佐派の家PARTⅢ
— 美しく住まうために —」
「土佐派の家」出版委員会刊

戦後、コンクリート、新建材などを中心に作られてきた日本の建物が、環境、健康などで、様々な問題を内包していることから、最近、伝統的な建築法が見直されるようになってきている。

著者たちは、二十年以上も前から土佐に伝わる建築法を再評価し、土佐の自然を生かし、土佐の風土に適し、現代の感性の輝きを持つ「土佐派の家」を企画し、建築し、提唱してきた先駆者集団である。

土佐では、優良な建築材、土佐漆喰、土佐和紙等を用い、厳しい自然に耐える家が建築されてきた。この旧来の知恵と現代の技術から産み出されたのが、災害に強く、エレガントな「土佐派の家」である。

一九九五、九六年に続き、第三冊目となる本書では、十名のメンバー

により、三十の建築物（一般住宅、集合住宅、オフィスビル、体育館、アトリエ、アーケードなど）について、理念、建築方法、作品の説明等が写真と共に示されている。

説明写真は美しく、限定された数の中で、よく的確にその建築物の特徴を伝えており、写真集としても楽しい。多人数の著作でありながら、よく統一され、簡潔、平明で分かり易い。いわゆる「学術書」ではないが、工法等の記述は精緻、厳密で、

素人の理解を超えて専門的であり、「学術的」であると評価された。

蔵治光一郎編
「水をめぐるガバナンス 日本、
アジア、中東、ヨーロッパの現場から」
東信堂刊

著者のうち、松本充郎、村上雅博、川中麻衣の三氏が高知県関係者である。生命を守る水は、生命を脅かす水でもある。古来「治山治水」は政治の中心命題でもあった。最近の人

口の増加、生活の近代化に伴い、利用、環境、安全等、多くの面で、人間と水の關係は複雑、困難になってきている。水に対する対応も、従来の自然科学的対応に加え、人文、社会科学の視点からも再構築する時代に来ている。本書は、いわば、これからの人間と水の「付き合い方」に關する含蓄深い本である。

著者たちは、水を「統御」の対象として、工学的に「治水」するのではなく、それを取り巻く、人間や自

然との関りを大切に、社会科学、人文科学的視点を含めた総合的な視点で、水問題に対処すべきである、という立場をとっている。災害に対しても、力づくで防ぐだけでなく、避ける、備える、避難する、という柔軟な態度の必要性を唱えている。事例として、国内では武庫川、物部川が、国外ではユーフラテス川、メコン川、ドナウ川が紹介されている。武庫川では、ダム建設計画を契機に、学識経験者と住民からなる「流域委員会」が行政や関係団体を巻き込んで、新しい視点で川の将来像を模索している。物部川では、漁協が中心となり、アユの棲める川づくりを目指し、行政、住民が協力する「物部川方式」を作り上げている。極めて今日的で、深刻な水の問題を、素人にも分かりやすく説明している。学問としては発展途上と言えるが、オリジナリティに富み、ユニークな研究として、評価された。

なお、受賞作と並んで最後まで残ったのは、角 忍著「カント哲学と最高善」で、難解なテーマが明解かつ論理的に記述され、読み易いとの評価を受けた。

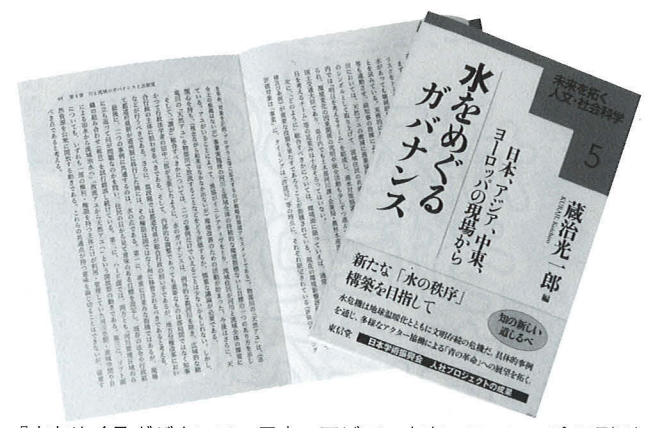
（なかうちみつあき／高知出版学術賞審査委員長）



【ユズの香り — 柚子は日本が世界に誇れる柑橘 —】



【土佐派の家PARTⅢ — 美しく住まうために —】



【水をめぐるガバナンス 日本、アジア、中東、ヨーロッパの現場から】



四国自然史科学研究センターではカエルの生息分布調査をしています。カエルや卵を見つけたら、情報をお送りください。http://www.lutra.jp/

1はじめに
日本には多くの水辺があり、その水辺には様々なカエルの姿を見ることが出来ます。高知県には十一種のカエルがいることがわかっていて、種名をあげるとニホンヒキガエル、ニホンアカガエル、ウシガエル、タゴガエル、ツチガエル、トノサマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ヌマガエル、シユレーゲルアオガエル、カジカガエルとなり、種の構成は、西日本の広い範囲(離島や沖縄県は除く)と同様となっています。

2高知の田んぼのカエル
多くのカエルは、田んぼを産卵場所として利用します。

高知県の田んぼで見かけるカエルは、ニホンヒキガエル、ニホンアカガエル、ツチガエル、トノサマガエル、ニホンアカガエル、ヤマアカガエル、ヌマガエル、シユレーゲルアオガエルの八種です。高知県ではカエルの産卵は一月から始まります(早いところでは、十二月から)。まだ氷が張るような寒い夜、林の近くにある浅い池や、冬でも水が溜まっている湿田にニホンアカガエルとヤマアカガエルが集まってきます。姿はよく似ていますが、鳴き声はまったく違って、お互いに相手を間違えることはありません。集まったオスたちは、にぎやかに鳴きながらメスの取り合いを始めます。一頭のみメスに数頭のオスが組み付いて、ソ

フトボールくらいの大きさの「カエル団子」ができるときもあります。アカガエルたちの饗宴は、二月の中ごろまで続きます。卵を産み終わったカエルたちは、また周囲の林に戻っていきます。

アカガエルたちの産卵が終わるころ、ニホンヒキガエルが産卵期を迎えます。ニホンヒキガエルもアカガエル類のように、冬でも水が溜まっている池や湿田に集まって卵を産みます。卵は紐状の長い寒天質に包まれていて、他のカエルの卵と簡単に見分けることができます。

太平洋沿岸の標高が低い地域の田んぼでは、三月になると水が入り始めます。田んぼに水が入ると、すぐにカエルの鳴き声聞こえます。最初に聞こえるのは、シユレーゲルアオガエルです。きれいな黄緑色をしたカエルで、カスターネットの音色のように澄んだ声で「ころろ、ころろ」と鳴き、ソフトクリームのような泡に包まれた卵の塊を、畦の泥の中に産みます。

次に聞こえてくるのはニホンアカガエルです。シユレーゲルアオガエルとよく似ていますが、ニホンアカガエルには目の周りに黒いラインがあります。簡単に見分けることができます。体の色を変えることができ、葉っぱの上にいるときは黄緑色、暗い所や石の上などにいるときは灰色に変わり、大きな黒い模様も浮き出ます。雨が降りそうになると盛んに鳴いているのがこのカエルです。

谷地森秀二
かえるのがうたがきこえるよ。
~高知県にすむカエルたち~
鳴き出します。暑さに弱いカエルで、田んぼの中よりもそのまわりの木陰になった水路でよく見つかります。九月ころまで繁殖期が続くカエルで、夏過ぎに生まれたオタマジャクシは、そのまま越冬して翌年の春にカエルになります。これらのトノサマガエル、ヌマガエル、ツチガエルは、カエルになっても田んぼから離れず暮らします。

ここまで紹介した五種のカエルは、卵を産み終わると田んぼから離れて、まわりの草原や林で暮らします。

田んぼがすんだころから鳴き出すのはトノサマガエルです。ジャンプ力が強く、畦を歩いて足元から飛び出します。高知県では、見つけられる場所が減ってきているといわれています。

四月の終わりころ、気温が高くなってくるとヌマガエルが鳴き出します。高温に強いカエルで、このカエルのオタマジャクシは、水温が四十五度を超えても生きています。

五月の中ころになると、「ギューイ、ギューイ」と洪い声でツチガエルが

3カエルの生活

ほとんどのカエルは、卵やオタマジャクシのときには水中で暮らし、カエルになると陸上も使って生活をします。カエルは水中と陸上の両方

の環境がセットになっていないと生きていけない生き物です。そしてカエルは水辺の生態系において、とても重要な役割を担っています。カエルの食べものはバッタやコオロギなどの昆虫、ムカデ・ミミズなどの小さな生き物です。カエルが生きていくためにはこのような生き物のたちが必要であり、見方を変えればカエルがいる場所には多くの小さな生きものたちが暮らしているということがいえます。また、カエルはヘビ・サギ・タヌキ・イタチなどの多くの生きものにエサとして食べられます。

カエルを食べる生きものたちも集まってきます。カエルがいる場所は、水辺と陸地が連続していて、多くの生きものがすむことができる多様な環境がある場所であると判断できます。

4カエルの危機

ところが最近、カエルたちにとって重大な危機が訪れています。国際的な自然保護機関であるIUCN(国際自然保護連合)は、二〇〇四年十月十四日に、「世界中で両生類が劇的に減少しており、一九八〇年以降、両生類の三分の一にあたる一八五六種が絶滅の危機にあることが最新の研究で明らかになった」と発表しました。その理由は、田んぼや水辺の消失による生息地の破壊、非稲作期の乾田化や早場米の普及、コンクリート製の水路や畦の増加などの農業形態の変化とカエルの生活史

のずれ、家庭用洗剤や農薬などの化学物質による水質の汚染、オゾン層の破壊による紫外線の影響などいろいろと考えられています。はっきりとしたことはまだよくわかっていませんが、いずれも人間に原因があるようです。

カエルの体には体毛や羽毛、ウロコなどが無く、皮膚が露出しています。そのためカエルは、農薬や除草剤などの化学物質を体に取り込みやすく(カエルが、おなかの表面から水を吸収することを知ってました?)、環境の汚染に敏感に影響を受ける生き物です。ですから人間にとつて、カエルたちは環境の変化を事前に察知するための感知器の役割を持っていると考えられています。

両生類を研究している学者たちは主張します。「両生類は、一般的な環境の健全性を図る上で、自然界で最も優れた指標のひとつである。その破滅的な減少は、現在が重大な環境破壊の時代であるという警告といえるだろう」と。高知県ではカエルたちは心配ないでしょうか?

五月、一年のうちでカエルを見つけるのに一番よい季節です。近くの水辺に目を向けて、自分の周りにどんなカエルがすんでいるのか、彼らに何か起こっていないか、ぜひ調べてみてください。

やちもりしゅうじ / 四国自然史科学研究センター長

大

学の修士課程で異文化コミュニケーションを学ぼうと、フィンランド西部の都市ヴァーサにやってくる。一年八カ月。凍っていた海の水も解け始め、渡り鳥も少しずつ戻ってきています。冬には一日三時間ほどしかなかった日照時間も今は十二時間。これから夏至に向けてどんどんと昼間の時間が長くなります。

そんな北国、ここ、サンタの国では、やっぱりヨウル（クリスマス）は一年で一番大切な行事。でも、春を告げるパーシアイン（復活祭）も皆心待ちにしています。今回は、同じ大学に通うパウリーナ・マキパーさんの家族と迎えたヨウルとパーシアインについてお話しします。

フィンランドでは、十一月末頃からヨウルまでに、ピック・ヨウル（小さなクリスマス）という忘年会のようなパーティを、友達や同僚と行います。同じ頃、町の中心にあるマーケット広場ではツリーやリースを売るクリスマス・マーケットが始まり、プレゼントを買う人で町は急

にぎやかになります。ヨウルは、家族と迎えるお祭りを家掃除してきれいにした後、ヨウル・クーシ（クリスマスツリー）を部屋の中に入れ、飾り付けをします。十二月二十三日、マキパー家恒例のグロギパーティがありました。グロギとは、赤ワインにシナモンやク

サンタの国から

渡辺知子

《後編》

ローヴなどのスパイスを加え温めたものに、レーズンとアーモンドのスパイスをトッピングする、ヨウルの代表的な飲み物です。ぶどうや黒ずぐりのジュースにスパイスを入れて作ったノンアルコールのものもあります。この日は十七人が集まり、グロギを飲みながらケーキやお菓子をいただきました。

二十四日はパウリーナさんの父方の家族のお墓参りから始まり、三日ほどは持つ大きなキャンドルをお墓に供えました。午後、今度は母方の家族のお墓参りへ。この時刻に



ねえ、それ私のプレゼント？（2008年12月）



をしたりと、ヨウル・アールト（クリスマス・イヴ）の夜は更けていき

ました。二十五日には、父方のおばあちゃん

のところに八人が集まり、料理をいただきました。父方、母方のそれぞれのおばあちゃんのクリスマス料理を堪能したヨウルでした。

冬には冬の楽しみがありますが、その長い冬の先にある春はまた格別です。パーシアイン（復活祭）が近づくと、町は黄色と緑のものであふれます。花屋の店先は、水仙、チューリップ、桜梅などの黄色い花で埋め尽くされます。暗くて長かった冬にぱっと光が射し、新しいエネルギーで町が染まる気がします。

今年のパーシアインは四月十日から十三日。一週間前の土曜日には、小さな魔女たちが近所に現れます。ネコやナギの枝にカラフルな羽などを飾った魔法の杖を持って、「ヴィルヴォン・ヴァルヴォン・トゥオレックス・テルヴェックス・トゥレヴァクス・ヴォデクス・パーシアイセカ・ムツレ」（魔法の呪文で、元気をあげる。楽しい年とパーシアインになるように。この杖をあげるから、何かいいものちょうだいね）の意味）と杖を振り振り、おまじないを唱えます。おまじないが終わると子どもたちは杖を渡すかわりにチョコレートなどのお菓子をもらいます。

マキパー家にはパーシアイン当日の四月十二日にもやってきました。男の子たちは魔女になるのに抵抗があつたらしく、ゾンビやピエロ：と

なんだか不思議な仮装行列のよう。この日は、十七人が集まり、とてもにぎやかに過ごしました。じゃがいものラテッコをはじめ、鮭やミートボール、サラダなど、今回も盛りだくさんのお料理です。

パーシアインならではの食べ物といえ、「マンミ」という麦芽を発酵させて作るデザート。こしあんのような色でざらざらとした舌触りのマンミは、こちらの人も好き嫌いがはっきり分かれる食べ物で、よく「マンミを食べたことがある？」と、聞かれます。「うん、好き」と答えると、「ええっ？」と驚かれるか、「おいしいよねえ」と満面の笑みを返されます。黒砂糖や焼きいもを連想させる味で、「ん？これはどこかで食べたことがある味だけど、なんだらう？」という感じです。今では家庭で作ることもなく、買って食べるようです。他にもパーシャというロシアのデザートもあり、料理好きのお母さんのおかげで、一般の家庭よりバラエティーに富んだ料理（手作りドーナツやピザ、三種類のケーキやパイもありました）が並んでいたのではないかと思います。

フィンランドには、その季節ならではの食べ物や古くからの習慣が色

パーシアインはデザートも盛りだくさん（2009年4月）



は墓地には一面キャンドルが灯されていて、暗闇に浮かぶキャンドルの波がなんとも幻想的でした。その後パウリーナさんの母方の家族がおばさんの家に集まり、十九人でクリスマス料理をいただきました。フィンランドのクリスマス料理はハムがメインで、その他にじゃがいも、レバー、にんじん等各種ラテッコ（キャセロール）、サラダ、ロツソツリ（赤いビーツのサラダ）、燻製にした鮭やニジマスなどおいしい料理がいっぱいです。クッキーやケーキなどデザートも合わせるとかなりのボリュームになり、体重が気になる

ところですが、楽しい雰囲気についてい食が進みます。

さて、ヨウルの主人公は、やっぱり子どもたち。朝からずっとヨウル・ブッキ（サンタクロス）を待つ子どもたちは、外が暗くなる三時頃から急にそわそわ。大人たちに「ヨウル・ブッキはまだ？」と何度も尋ね、「もうすぐじゃない？」。そんな答えにますます落ち着かない様

濃く残っています。こういうものを体験できるこそが、まさに異文化コミュニケーションを学ぶ者にとって醍醐味と言えます。あらためて日本の伝統料理や習慣をもっと大切

にしたいなあと、思う今日この頃です。

（わたなべともこ／大学院生）

マキパー家には、パーシアインにゾンビやピエロが来た（2009年4月）



パーシアインの飾りつけ（2009年4月）



ヨウル・アールト（クリスマス・イブ）の一場面。中央が筆者（2008年12月）



マキパー家のパウリーナ（左）とカトリナ（右）姉妹（2009年4月）



ナマステネパール! (下)

嶋崎京都

「あなたはほかの十万の男の子とまったく同じような男の子だ。(中略)ところが、おれたちは互いに相手が必要になる。あなたはおれにとってこの世にたった一人の男の子になるし、おれはあなたにとってこの世にたった一匹の狐になる……」

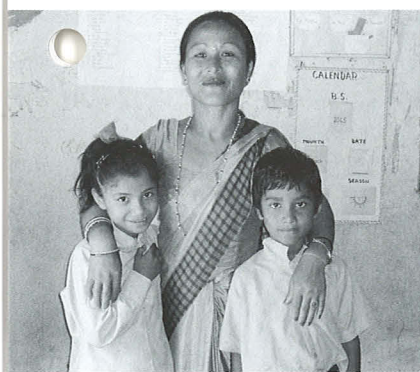
私にとって、ネパールという国も地球に存在する多くの国のひとつにすぎなかった。しかし、この研修を通して言語や宗教、国の抱える課題などさまざまなことを学んだ今、ネパールは特別な存在になった。

特に教育に関しては、日本との違いが大きく、皮肉を感じました。学びたくても学校がない。お金がない。教材がない。先生がいない。日本には最先端の教育設備や教具・教材が整い、最低でも九年間義務教育を受けられる。学ぶ意欲に乏しい日本の子どもたちとは対照的に、目をキラキラと輝かせ「勉強が好き!」とはにかむネパールの子どもたちに、よりよい環境で教育を受けさせてあげたいと

切に感じた。

学ぶことに貪欲なネパールの子どもたち。「学び」こそが「生き抜くこと」に直結している彼らにとっては、当然の思いなのかもしれない。

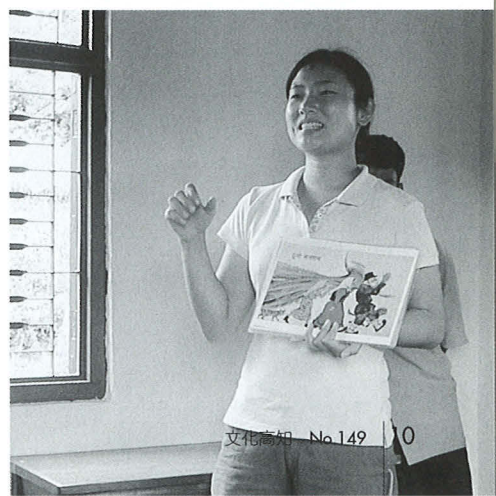
私たち日本人はいつの間にか「学び」に鈍感になってしまったのか。「学び」が生死を左右しない、学ばなくてもなんとか生きていける。そんな日本という国に生まれ育った子どもたちに、学べるこのありがたさを伝えたい。学びたくてうずうずしている瞳を見せたい。学ぶことで世界が広がる、世界とつながる。日本の外に目を向け、世界の人々と自分がつながっていることを知るきっかけ作りをしたい。けっして同情でなく、蔑むのでも奢るのでもなく、ただ自分自身のおかれている状況下でこつこつと学び続けることの大切さを伝



えたい。あなたたちには学ぶチャンスがある。もつと貪欲に、もつと懸命に、と。

そうして身に付けた技術や知識はいずれ形を変え、今まで何とも思っていなかったよその国を思いやる心や、支援するための技術となるだろう。そして、そのよその国は「かけがえない国」へと変貌するに違いない。「学び」はそんなかけがえない国を少しづつでも好転させるエネルギーになると私は考える。日本が世界ではない。世界の中の日本なのだ。

「先進国日本」を標榜するならば、その担うべき役割は自ずと知れてくるはず。「先進国」という冠の下にいつまでも胡坐をかいていてはいけない。戦後から現代の繁栄に至るまでの道は、けっして



自国民だけで築き上げたものではない。今現在においても、たとえば、食料自給率四〇%の日本の台所は諸外国に支えられている。

よりよい世界を、「地球人」(「みんな」)の手で作ることができればこんなに素晴らしいことはない。より多くの国のことを知り、一人ひとりにとってかけがえない国を少しでも増やしていく。私たち教育現場で働く者は、その一助となることができるのではないだろうか。

十日間の研修の終わり、少し大きくなった「ナマステ」の声。これからが本当のスタートだ。

しまさきみやこ／高知県立高岡高等学校教諭

言葉

の現場から⑮

「坊っちゃん」のなぞを読み解く

広井 護

「親ゆずりの無鉄砲で子供るときから損ばかりしている」

夏目漱石の名作「坊っちゃん」の冒頭である。この一文からは、多くのことを教えられた。

中学生に初めて教科書の「坊っちゃん」を授業したときは煩悶した。何を教えて良いかわからなかった。内容は読めばわかるように書かれている。そして面白い。ところが、授業を始めると、急につまらなくなる。「坊っちゃん」は、どんな性格だろう?」

「…そのときの坊っちゃんの気持ちは何?」

「…そのときの清の気持ちは?」
などと発問すればするほど、教室の空気はしらけてゆき、やがて居眠りや私語が始まる。そんなことをするよりも、授業をつぶして読書の時間にし、文庫本の「坊っちゃん」をまるごと読ませた方がよほど有意義だと思ったりした。

教えれば教えるほど、作品の魅力が失われてゆく授業とは一体何なのだろうか。国語とは、一体何を教える教科なのだろうか。…という疑問に直面したのもそのころだった。

ところが、ある時期から気がついた。授業がうまくいかないのは、私が作品を読めていないからだだった。冒頭の一文で問うべきは、坊っちゃんの性格ではなかった。性格は「無鉄砲」とはつきり書かれている。書かれていることを問うても、読みは深まらない。「読み」とは、書か

れていることから、書かれていないことを読み取ることだろう。だとしたら発問はこうすべきだった。
「坊っちゃんの父親は、どういう性格だろう?」

実際この発問には、生徒は食いついてくる。
「親ゆずり」と書かれているのだから、親も無鉄砲だったのである。ところがすこし後を読むと、不思議

なことに気がつく。「おやじはなんにもせぬ男で、人の顔さえ見れば、きさまはだめだ、だめだと、口ぐせのように言っていた」とあるのだ。無鉄砲な父親が、無鉄砲な息子を「だめだ、だめだ」と言うのはなぜだろう。

…というふうには、なぞを追ってゆく。そこに、読みの面白さがある。「坊っちゃん」冒頭の一文は、「坊っちゃん」という作品の主題と深くかかわっている。
坊っちゃん後に、松山の中学校でこういう啖呵を切る。

「これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ」坊っちゃんの父親は、元旗本なのである。そして「なんにもせぬ男」だった。
「なんにもせぬ」とは、無職を意味する。父親は、明治維新後の世の流れ、市場原理主義に立つ資本主義の世の中で落後した負け組の男なのである。先祖代々の財産を食いつぶすことで生きていたが、その死後は、家屋敷も売り払われ、女中の清は解雇される。だから、自分と似た性格である坊っちゃんを「だめだ、だめだ」と言ったのである。それは自分に向

けられた自嘲の言葉でもあったはずだ。…といったことは書かれてい

いが、読み取ることが可能である。ところで、「親ゆずり」という言葉は、「親ゆずりの財産」とか、「親ゆずりの才能」というように、普通は肯定的な内容に使われる。「親ゆずりの無鉄砲」というのは、変な表現と言える。坊っちゃんが、あえてこの変な表現を使ったのはなぜだろう。「親ゆずり」はその人物の「ルーツ」を暗示する言葉でもある。

坊っちゃんは、「無鉄砲」こそ、自分のアイデンティティ(存在証明)だと宣言しているのではないだろうか。

「損ばかりしている」にも、同じことが言える。「損ばかりしている」とは「俺は損得では生きてこなかった」という意味だ。損得ではなく、別の価値観で生きてきた。そのため、損をしてもへっちゃらなのだと言明を切っているのである。

つまり冒頭の一文には、坊っちゃんの、時代遅れではあるが憎めない「武士的アイデンティティ」が強烈に表現されている。坊っちゃんは、明治の世の「ドン・キホーテ」なのだ。…というような読みが、授業を活性化させる。

「読み」の難しさと面白さ。その両方を教えてくれた一文である。(ひろいまもる／土佐中学校教諭)



が～まるちよば
サイレントコメディ JAPAN TOUR 2009
Glorious Return

「が～まるちよば」は英国エジンバラ演劇祭での受賞をはじめ世界で高い評価を受けながら、23カ国、150カ所以上でパントマイムをベースとしたパフォーマンスを行っている二人組のユニットで、いま日本全国で大ブームを巻き起こしています。

モヒカン刈りでスタイリッシュな二人が考え出したのが、パントマイム+笑い=サイレントコメディという舞台公演。舞台が始まるとスピーディーな大道芸で、いきなり観客を二人の世界に引き込みます。軽いトランクを重たく、あるいは、空中で止まっているように見せたり、衝立の向こうでエスカレーターに乗るように見せたりと、結成10年に裏打ちされた高度な身体表現能力は、笑いを超えて感動のレベルに達していました。引き続き「やかん」「催眠術師」「白い男」などのお題のもと、二人が息の合ったパントマイムを練り広げ、観客はその一挙手一投足に腹を抱えて大笑いしました。

後半はがらりと雰囲気を変え、チャップリンの『街の灯』をが～まる流にアレンジし、盲目の女性と彼女に想いを寄せる心優しい泥棒の話をも熱演。コミカルな動きに笑っていた観客も、気がつくとも感動と涙の渦に巻き込まれていました。

最後は、珍しい全員のスタンディング・オーバーション。拍手はいつまでも鳴りやみませんでした。

第25回写真コンテスト・高知を撮る 入選作品展

「写真コンテスト・高知を撮る」入選作品展では、3月17日(火)から22日(日)までの会期中に1,125名の来場者がありました。

今年は高知県内外の102名の方から2部門合わせて296点の応募があり、「記録写真部門」では33名63点のうち、特選2点、準特選9点、入選19点が選ばれ、第19回のコンテストより新設した「I LOVE 高知部門」では96名233点の中から、特選2点、準特選10点、入選22点が選ばれました。

記録写真部門の作品は毎年来場者の反応が大きく、「懐かしい」という声がよく聞かれました。また、作品や出品者に、広がりが出てきたようでした。



zakka. café. gallery
POURQUOI

林 和加

ブクワは十一坪という小さな空間に、雑貨スペース、カフェスペース、ギャラリースペースと、いろんなものをギュギュッと詰め込んだ楽しいお店です。

たとえば雑貨。洋服や帽子、バッグ、アクセサリや靴などの服飾小物、写真やイラストのポストカード、カラージュエリー紙物やクマのぬいぐるみなどなど、主にハンドメイドの作品を販売しています。高知県の方を中心に二十〜三十名の作家さんの、時には自由に、時にはテーマに合わせた、それぞれの個性を生かした作品ばかりです。

カフェではオーガニックフェアトレードの「はなればなれ珈琲」さんの豆を、オーダーをいただいているから挽いて淹れています。ブクワのカフェ・オ・レはホイップした少し甘めの生クリームをのせていて、ちょっぴりお徳感があると人気です。デザートはどちらも大変人気がある「Miete」さんと「ROLL」さんのケーキを日替わりでご用意しています。わずか四席でこぢんまりとしています。友達の家に来たような気分できつろげるスペースになっています。

ギャラリーは、カフェスペースの壁の一面。個展や季節に合わせた企画展など、楽しんでいただける展示を月替わりで行っています。

五月は高知出身で現在は東京で活躍のHirohito (トリホリユウ) megさんの個展を開催中です。四季をテーマにした写真や、「衣食住」にまつわる生活の楽しみ方の提案など、日々の暮らしを大切にされているHirohitoさんのライフスタイルが感じられるとてもステキな個展です。

六月一日から八日までには牧野植物園にお勤めの福川直人さんによる「こけ玉展」を開催します。昨年好評だった、新緑をテーマにした企画展「green days」の中でも特に人気のあったコーナーです。七日(日)、八日(月)にはカフェスペースで「こけ玉」のワークショップも行い

trifolium megさん撮影



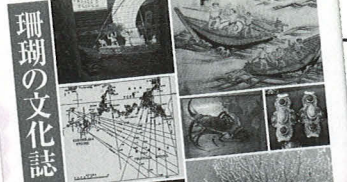
ますのでお気軽にお問い合わせ下さい。

六月十一日からは、京都の姉妹のハンドメイド作家・Blue Blancheさんの「チェックとしましのおしゃれ」を、七月には県内外の作家さん約十名の「手作りの帽子展」を行います。ぜひ遊びにいらして下さい。ブクワに足を運んで下さった方に、ギャラリーはもとより、雑貨でもか

フェでも、暮らしの楽しみをなにか見つけていただけると嬉しいと思っ
ています。

(はやしわか/ブクワ店主)

zakka. café. gallery
POURQUOI
高知市南はりまや町一〇一〇
電話〇八八四八四九六九八



珊瑚の文化誌
コースロードを巡る12話
珊瑚を自然科学から歴史、文化、言語等、様々な角度から探る

珊瑚の文化誌
宝石サンゴをめぐる科学・文化・歴史
岩崎 望 編著 東海大学出版会、2008年12月発行

高知県の特産品である宝石サンゴを、主に自然科学の側面から分析した第1部と人文科学の側面からとらえた第2部からなる。歴史や文化と深く関わってきた珊瑚の魅力に触れることができるのでは。

高知 こあんなな本

このコーナーでは高知に関する出版物を紹介しています。

風俗

土いじりの快感

ひよんなことから、以前田んぼだったであろう小さな休耕地をこの春から自由に使うことができるようになった。長い間ほったらかしにされていた土地だから、ススキやセイタカアワダチソウが好き放題に根を張り、最初はどんな地形かさえわからないくらいであった。草を刈り、この春から数カ月、仕事に行く前の数時間と休日の空いた時間に、野良仕事ならぬ土いじりをしている。コナラやヤマモミジの雑木や果樹を植えたり、粘土質の田んぼの土を畑の土にするための土づくりに崩れた石垣をつき直したりしている。鉄やスコップで土を掘り起こすのはたいへんな重労働だと気がついたが、時間を忘れて身体を動かしている。まるで子

どもが砂遊びをしたり、どろんこになって無心に遊んでいる様子と少しも変わらない。土を掘り返したり、果樹や落葉樹を植えて、新芽が出てほしいに葉が大きくなくていくのを眺めていると、身体の中か本来持っている野生の部分が喜んでるのを感じる。野生といってもけっして荒々しいものではなく、生物としての自然な感覚ぐらいの感じなのだが。私のなかに、かつて長い間日本人が農耕民族であったころの血が騒いでいるのである。鶯の数鳴きなどは俳句の季語として知っていても実際に聞いたことはあまりなかったが、すぐ近くの叢でまさに初鳴きが聞こえてくるし、小川の堰堤から水の落ちる音が聞こえてくる。虫さへも珍しい闖入者にまわりつく、まさに自然のただなかにいる快感を味わっている。

(霖)

第158回 市民映画会

あの日の指輪を 待つきみへ

実話から生まれた感動のラブ・ストーリー
指輪に封じられた愛の秘密が明かされる—
運命の愛は、一度きりじゃない。

パリ、恋人たちの2日間

(PG-12)

大人の恋は、甘いだけじゃない
パリで過ごす2日間、
別れの危機は突然訪れる!?



と き：6月25日(木)・26日(金)
ところ：高知市文化プラザかるぼーと大ホール
上映時間(両日とも)
指輪 ①11:20 ②15:20 ③19:20
パリ ①13:30 ②17:30
料 金：一般前売り1,300円(当日1,500円)
割引(前売り・当日とも)1,000円
※学生証、長寿手帳、障害者手帳などをご持参の方は割引料金
※前売り券は、かるぼーとほか市内各プレイガイドおよび指定のサニーマートで販売
※お問い合わせ：(財)高知市文化振興事業団 088-883-5071

今号の表紙

「後れげ」

田島 栄

バスガイドさんの後ろ姿を…特に肩口から頭部にかけてをスケッチする時、けっこう絵になるな、と思っていた。

実際に油絵では初めての試みになったが、さてどうか。

(たしまさかえ)



高知を撮る

第25回写真コンテスト入賞作品

鯉焼くぜよ! 旨いぜよ!

竹村 悦子

(平成20年5月 中土佐町久礼)

かつお祭のメインとなるたたきづくりに、祭りを盛り立てる情熱は、炎の熱さ

アラフォー世代の私は、これまでの人生の中で今最もポジティブに生きている気がする。なかでもエネルギーの多くを費やしているのは子育てである。

我が家には中学生の二人の子どもがいる。小学校には八年間お世話になり、その間PTA活動に大忙しだった。街の中心部の小学校だったのだが、私の生まれ育った田舎よりも地域とのつながりが深くPTAの活動も活発。子どもが小学校を卒業したというより、私が卒業したと言っているほどどっぷり小学校生活を満喫した。

思えば、私自身の小学校生活はとも辛かった。高知の公立学校が最も荒れたといわれた時代に公立小学校に通い、イジメや「しごと」を受けながら涙をこらえて学校生活を送った。社会人になったばかりの頃、六年の時の担任から便りももらったが「私はいい子ではありませんでした」と返事した。先日もイジメに加わっていたので嫌いだっから。三十年後、娘や息子が毎

「追体験」

風俗歳時記



日平和に通う当たり前の風景に幸せを感じたが、突然学級崩壊。それでも毎日遅く登校する娘の姿に自分の幼少期を重ねた。

息子は心から入学を希望していた私立中の受験に、この春失敗した。受験番号の無いボードを拳を握り締め目に涙を浮かべて見つめる息子に、二年も大学入試で失敗し八方ふさがりだった私の辛い記憶をダブらせた。

「挫折ってありますか」と先日、私の元に取材に訪れた出版社の記者に聞かれた。日頃は明るくしているのに不幸など味わたることがないよに見えぬのだろうか。誰でも挫折はあると思っが、私の場合、仕事上のストレスで、癌細胞が発生する前段階と診断されるほどの苦しい経験も六年前にある。挫折の多い人生を送ってきたが、子育ては自分が失敗したことを生かせる機会でもある。子どもを育てながら追体験することによって、人としてまた成長できるような気がする。

(立花香)

第61回

高知市展



出品

- 搬入日時
2009年5月24日(土)25日(日)
午前9時▶午後5時
- 搬入場所
高知市文化プラザ かるぼーと
7階市民ギャラリー
- 出品料(1部門)
一般/1,500円・学生/1,000円

■開催日時
2009年 5月30日(土)▶6月14日(日) [ただし、月曜日は休館]
午前9時▶午後7時 初日は午前10時開場、最終日は午後5時で終了です。

■入場料
前売300円・当日400円
長寿手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳・身体障害者手帳所持者、及び高校生以下は無料

■会場
高知市文化プラザ かるぼーと 7階市民ギャラリー

絵画(洋画)

- 日本画
- 書道
- 先端美術(立体)
- 彫刻
- 陶芸
- 工芸
- 写真
- ペン字
- デザイン

Independent

アンデパンダン

■お問い合わせ
(財)高知市文化振興事業団 企画事業課 088-883-5071

■主催/高知市展代表委員会・(財)高知市文化振興事業団・高知市教育委員会
■共催/高知新聞社・NHK高知放送局・RKC高知放送・KUTVテレビ高知・KSSさんさんテレビ



かるぼーと

デザイン: 杉谷久恵